

<随想>私の暦

立花, 雄一 / タチバナ, ユウイチ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1997-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019936>

私の暦

立花 雄一

卒業後五十年……。同級会をやるというので、ひさしぶりに帰郷した。

私は不精な腰をあげて、そしていささか勇み立って、東京の地から富山県へ旅立った。だが、あたかもその日、北陸は初雪であった。上越線にのって、清水トンネルをぬけると、まさしく、そこは川端康成がいう雪国であった。それは掌をかえすような、衝撃的な変様であった。私は茫然とし、しばし息をのまざるをえなかった。それにしても、五十年暖国でくらし、時間の落差はおおきかった。

沿路、雪と雨とみぞれが断続した。越後柏崎の辺は、夏ならば山国信州から臨海学校にきた児らの海水浴で賑うところだ。だが、今は海の水が白く逆巻き、しぶき、鉛色にとけあった空

と海のけじめもさだかならず、おどる波濤がまるで車窓におおいかぶさってくるようであった。そして、中越国境の親不知の海……。北陸の海辺でぞだった私が何十年忘れさっていた風景にちがいない。

かくして、私は郷里の駅につく前から、すくなからぬ狼狽に見舞われていた。いつか郷里のへソを忘れさっていたのである。東京にあつて、私はつねづねひとにすすめていたのである。北陸を旅するなら、初冬が一番である。裏日本特有の暗い旅愁を満喫できると。

車中で味合つた、私の五十年の落差は郷里につくとさらに追いつき、打ちかけられた。五十年ぶりに会つた昔の友らは、どの顔も、どの顔も、会つた瞬間、ショートした電灯のように判別できなかつたのである。しかし、五秒し、十秒し、記憶の回線がようやくつながると、たちまち大笑いであつた。なんのことはない、五十年の皮膜をとおして、普通のカボチャや、ヤマイモの顔がそっくりに出現したではないか。

——戦争中、田や、山や、工場へ共においやられた仲間たちであつた。勤勞奉仕や、通年動員。あるいはモッコをかつぐ河川工事。あるときは二宮尊徳のように柴や炭俵を背負い。ついには石灰工場で、石灰や石炭をつんだ重い鉄のトロッコを押し、また巨大な灼熱した熔鋳炉にむかい、おおきな鉄のスコップを揮つて、石灰石を焚きこむ重労働をやつた。約半年間、実業学校二年生のとき。二十分の焚きこみ、四十分の休憩。この長短倒錯した時間が、それがいかに重労働であつたか語るだろう。おまけに、その熔鋳炉は夜を日に生産をついだため、よく爆発

をおこす危険なしろものであった。熔鉱炉の傍の控所には、大相撲土俵脇にあるような塩が大箆にいっぱい盛つてある。休憩中、その塩をなめなめ、バケツに汲みおいてある水をがぶのみする。四十分休憩しても、熔鉱炉の熱気にあぶられた全身からは、汗がふきでてとまらない。事実、大の男もたおれて、担架で運ばれた。われわれがようやく無罪放免された後、強制連行されてきた朝鮮人の青年たちが替った。

敗戦を迎えたのは、私の三年生の夏である。前年秋、東京蒲田矢口渡国民学校の児童たちが私の町に集団疎開してきた。われわれは学校の命令で、かれらの布団包を停車場から分宿する寺々へ運ぶ作業をした。やがて訪れた戦争さいごの年、一九四五年の冬は家々の屋根の雪降しを二度、三度もせねばならぬほどの大雪であった。町中、雪でおおわれ、街路は高低のはげしい雪の山の尾根を行くような態であった。登下校する疎開児童らは、おおくの者がゴム長も、藁靴もはいてない、素足にもひとしい短靴で、雪の尾根の道を一列になって、滑って転ばぬようおぼつかない足取で歩いていった。私の家の前側も、裏側も寺であった。そこにも、かれらは分宿していた。ある日、背戸に立っていると、雪道をかれらが帰ってきた。子供らは声を合せてなにかを歌っていた。越中富山の葉屋さん、鼻糞まるめて万金丹と高らかに。戦争中つくられた、めんこい子馬のたて髪をの替歌であった。私はあきれた。何事ぞ、越中富山の世話になりながら、その恩を忘れて、臆面もなく、鼻糞まるめてとは！ それはおいやられた子供らの、空きつ腹の底からわきでた、しつぺいがえしの歌声ではなかったか。痛烈な子供らよ。

また、その年の大雪の日曜日。休日になったのであろう。町外れの熔鉱炉が空に三基そそりたつ、あの石灰工場から、一人しか通れなくなった、わが町のメイン・ストリートにかけての雪道を、朝鮮半島から連行されてきた若者たちが降る雪にぬれそぼりながら、長蛇の列をつくって行き来していた。疎開児童以上に着たきり雀の姿。なぜ、かれらは歩いていたか。食べ物をもとめて……？ だが、町の店はどこも空家同然であった。食べる物など売っているはずもない。それでも、かれらはひたすら雪の街を行き来していたのである。……わが町にあった歴史の刻印。

戦後三年目、一九四八年四月、私はわれらが少年たちと別れて、法政予科へ入学した。ところが、その入学式の日、予科木の控の教室で、私の弁当箱が盗まれ、ぼつと出の私を震撼させた。そういえば、その頃、ふしぎな休日があった。買出日である。予科一年生が木、二年生が土、三年生が月曜日。戦後の物資、食料不足がまだつづいていたから。そしてインフレの進行。年間授業料四千元が一挙一万円に倍額されたのは翌年新制大学へ移行するときであった。

茫茫五十年。私の暦は戦中、戦後からさほどどうごいてない。今なお、対米英開戦の十二月八日、東京大空襲の三月十日、沖繩戦開始の四月一日、ドイツ降服の五月七日、広島原爆の八月六日、長崎原爆、ソ連参戦の同九日、そして敗戦の日の同十五日を中心にまわっている。私はそれでいいと思っている。いまさら、あたらしがることはない。(十一月記)

(たちばなゆういち・六三年修士卒)